

(スローガン)

力強い助走

バンクーバー冬季オリンピックでは、選手たち活躍は多くの国民に感動と勇気、そして元気を与えてくれました。スポーツが社会に貢献できることの大きさに、あらためて気づかされた 2 週間でした。

不透明な時代が続く日本において、我々体操界は社会に対し、何を貢献できるのか、あらためて考えさせられた 2 週間でもありました。

「全てのスポーツの基本は体操である」を信念とする「体操ニッポン」は、日本のスポーツ界をリードし、社会に貢献するために、自らが率先して変革を求め主体的に活動をして参ります。

(2009 年度・体操ニッポンの反省)

昨年の日本体操界を振り返ってみたいと存じます。

体操競技は、10 月に開催されました「第 41 回世界体操競技選手権ロンドン大会(2009 世界体操ロンドン大会)」において、男子は内村航平選手が史上最年少で「個人総合・金メダリスト」に輝き、田中和仁選手も「種目別平行棒・銅メダル」を獲得いたしました。しかし、目標であった「種目別・金メダル」を取りこぼしたことは、今後課題を残しました。女子においては、目標は「個人総合・8 位入賞」、「種目別・メダル獲得」でしたが、鶴見虹子選手が「個人総合・銅メダル」、「種目別段違い平行棒・銀メダル」を獲得し、43 年振りに複数メダルを日本に持ち帰りました。「体操ニッポン女子」の久しぶりの大躍進に、日本中が活気づきました。

また、3 月に千葉県・幕張にて開催されました「第 11 回アジアジュニア選手権(第 1 回ユースオリンピック予選)」では、男女ともに「団体・金メダル」、男子個人総合で野々村笙吾選手が金メダル、女子個人総合で谷口佳乃選手が金メダルを獲得、男女ともに「第 1 回ユースオリンピック」への出場権を獲得し、次世代ジュニアの育成も順調に進んでいることを証明いたしました。

体操競技は男女ともに、国民の皆様のご期待に十分応えることができた一年であったと存じております。

続いて、新体操は 9 月に開催されました「第 29 回世界新体操選手権三重大会(2009 世界新体操三重大会)」においては、地元開催のアドバンテージを含め「団体・銅メダル獲得」、「個人総合・10 位」という目標をたてましたが、結果は「団体総合 8 位」、「団体種目別・リボン & ロープ 4 位」、「個人総合・日高 舞選手 15 位」でした。しかしながら、地元開催の盛り上がりとともに団体のフェアリージャパン POLA が団体種目別にて過去最高位の 4 位入賞に終えたことで、日本新体操界の将来に明るさを見ることができました。

また、2 月にウズベキスタンにて開催されました「2010 アジアジュニア選手権(第 1 回ユースオリンピック予選)」では、日本選抜団体チームが金メダルを獲得し、「第 1 回ユースオリンピック」への出場権を獲得いたしました。新体操も体操競技と同様、ジュニア育成も順調に進んでいることを証明いたしました。

トランポリンは、11 月に開催されました「第 26 回世界トランポリン選手権 Санктペテルブルグ大会」で、男子シンクロにて上山容弘、外村哲也組が金メダル、個人 3 位に上山容弘選手、4 位に伊藤正樹選手(同点)という好成績を挙げました。しかしながら、団体戦でメダル獲得ができなかったのは今後課題を残しました。ワールドカップにおいては、伊藤正樹選手が個人で、長崎峻侑、伊藤正樹組がシンクロで年間最優秀選手に選ばれ、世界ランキング 1 位に輝きました。

女子は個人、シンクロ、団体の全てにおいて、あと 1 位順位が上がっていれば決勝進出という苦い経験をしました。ベテランの半本ひろみ選手が現役引退したあとをいかに埋めるかが今後の課題となります。

また、トランポリンにおいても「アジアジュニア選手権」での活躍により、男女ともに「第 1 回ユースオリンピック」への出場権を獲得いたしました。

振り返ってみれば、2009年度の「体操ニッポン」は自らが高い目標を設定し、その目標の全てを達成はできなかったものの、次期ロンドンオリンピックに向けて良いスタートが切れた年であったのではないのでしょうか。

(ロンドンオリンピックへ)

そして、いよいよ今年よりロンドンオリンピックへの予選大会が始まります。

男子体操競技は昨年一年間、多くの海外試合に研究チームを派遣し、他国の戦力分析を徹底的に行いました。その分析内容をもとに、今年の戦いを充実して参ります。10月の「世界体操ロッテルダム大会」では、「団体・金メダル、個人総合・金メダル、種目別・金メダル」獲得を目標とします。

種目別強化については早急に対策を講じ、国民の期待に応えるよう努力して参ります。世界体操界の潮流は、「団体種目」と「個人総合種目」そして「種目別6種目」の「体操は8種目」という認識に変化してきています。個人総合重視という体操史の呪縛から抜け出せずにいると、自らを変革できず、世界の潮流から取り残されてしまうという危惧があります。また、これからはじまるオリンピック予選においても、団体戦で勝利するためには種目別強化も必要となります。日本の強みである「団体」や「個人総合」を尊重しつつも、今後は種目別強化にも重点を置き、国民の皆様が期待するメダル獲得数についても追い求めて参りたいと存じます。

次に女子体操競技についてですが、昨年の「2009 世界体操ロンドン大会」では飛躍を遂げ、今年も同等、それ以上の成果を期待したいところですが、ベテラン選手の引退による団体のチーム力低下が大きな課題となっています。今年の「世界体操ロッテルダム大会」では、団体は「8位入賞」を目標とします。しかし、個人総合、種目別については、ともに「メダル獲得」という高いハードルの目標を設定し、今年の「世界体操ロッテルダム大会」のその先にある、来年の「世界体操東京大会」、再来年の「ロンドンオリンピック」でのメダル獲得に照準を合わせて参ります。

これらの高い目標を達成するため、特にロンドンオリンピックでの「団体女子メダル獲得」という悲願を達成するためには、これまでと同じ強化策を、同じように行っていたのでは到底達成はできません。このため、来年の「世界体操東京大会」を照準に、今年の1月より来年10月の東京大会まで、「22ヶ月間合宿」を味の素ナショナルトレーニングセンターにて開始いたしました。コーチとコレオグラファをウクライナより招聘し、専属トレーナー、栄養士などを配置し、選手のコンディショニング管理を徹底的に実施し、協会としてできる限りの環境整備を行い選手強化に取り組んで参ります。

ところで、バンクーバーオリンピックのフィギュアスケートで、高難度の演技を実施するも得点に反映されなかったことが議論となっています。このことは、いずれ採点競技全体に波及することが予想されます。採点競技基準の歴史を振り返ると、常に「高難度」と「美しさ芸術性」との対局を振り子のように振られています。バンクーバーオリンピック後の世論に押され、今度は高難度への評価が高まることも十分に予想されます。「美しい体操」が日本の持ち味ではありますが、今後は高難度の必要性に迫られてくることも十分考えられます。世界の情報収集を正確に且つ客観的に行き、対策を講じて参りたいと存じます。

続きまして、新体操はメダル獲得の可能性の高い団体種目に強化を特化して参ります。全国より優秀選手を選抜してチームを結成する「フェアリージャパン POLA」を継続いたします。今年の世界選手権はロシアで開催されることから、9月までは強化拠点をロシアのサンクトペテルブルグに移し、ヨーロッパでの転戦を行うなどして強豪国に遅れを取らない強化を行って参ります。また、コーチもロシアのトップコーチを採用し、グローバル基準での強化をはかり、今年の「世界新体操モスクワ大会」では、団体6位入賞を目標と致します。

個人につきましては、近年世界10位の壁を越えられない現状から、強化の抜本的見直しをはかります。

原則、得点26点を獲得できない選手は海外に派遣しない、という世界標準得点制度の厳しい方針を導入します。このことは個人種目をあきらめるのではなく、より高い極みを目指すためのものです。

バンクーバーオリンピックでは日本がフィギュアスケート王国として君臨している姿を世界に見せつけました。フィギュアスケートの前例は、日本が新体操王国になることも決して不可能ではないことを立証してくれました。これまでの目標設定、指導方法を抜本的に見直さなければなりません。全日本新体操チャイルド選手権には世界でも最多数の1千名が参加しており、その素材は決してヨーロッパ諸国と比較し見劣りするものではありません。指導者の考え方を刷新し、フィギ

アスケットに学び、チャイルドからの中長期選手育成を手掛け、「2016年リオデジャネイロオリンピック」を照準に、一刻も早い立て直しをはかります。

今年の「世界新体操モスクワ大会」では、オリンピック出場権獲得の目安となる個人総合15位を目標と致します。

トランポリンは「2010世界トランポリンメス大会」で、男子は個人、シンクロ、団体の全てにおいてメダル獲得、女子は団体での決勝進出を目標とします。女子においては、個人選手の実力向上を確実にいき、現時点で2点以上の差をつけられている難度得点差を解消できるよう対策を講じます。

また、今季より導入された新型ベッド(4×4)に早く慣れることも重要な課題です。すでにヨーロッパ各国の選手は新型ベッドで練習しており、4月に行われるワールドカップからは新型ベッドで大会が行われます。さらに世界選手権でも、普段使用されていないジムノバ製のトランポリンが使用されることが決定しており、こちらについても早急の対応策が必要となって参ります。

トランポリンは、今年の世界選手権で好成績を収め、ワールドカップシリーズにおいても世界ランクを下げないように努力し、ロンドンオリンピックへ繋いで参りたいと存じます。

体操競技、新体操、トランポリンと全ての部門において、選手の世代交代が進むなか、未知数の選手たちによる戦いとなることから、大きな不安もございますが、これらの高い目標に挑戦することが、2年後のロンドンオリンピックでの更なる飛躍につながると確信を致しております。

(大会運営と普及)

さて、昨年は三重県ならびに三重県体操協会の多大なるご支援を賜り、「世界新体操三重大会」を盛大に開催し、成功裏に大会を終えることができました。あらためて関係各位に、心より感謝の意を表したいと存じます。

国内における世界大会開催は普及に絶大な効果を与えます。三重大会開催後、各地での新体操の普及が活性化したとの報告を多く受けております。新体操は民間クラブの開発・育成が進んでいることから、引き続き民間クラブの活性化による普及を継続して参りたいと存じます。

そして、いよいよ来年は「2011世界体操東京大会」の開催となります。「体操ニッポン」は、この機に大きく飛躍しなければなりません。本大会を機に、体操がメジャースポーツ化するための重要なポイントは3つあると存じます。

1つ目のポイントは選手の活躍です。どれだけ選手が活躍できるか。どれだけメダルを獲得できるかです。

2つ目のポイントはメディアの活用です。これについては、フジテレビのご協力により日本体操界史上初めてのプライムタイムでの放映を確約いただいております。大きくメディアで取り上げられ、体操の認知度は一気にアップすることと存じます。

そして3つ目のポイント。これが最も重要なポイントだと存じます。体操愛好者の受入れ体制の整備です。

多くの人々が体操に興味を持っていた時に、我々体操関係者は、それにどうやって対応するのか。その受入れ体制の整備が急務です。これが出来なければ体操のブームは一時的なもので終わってしまいます。決して本格的普及発展には繋がりません。人気が出たので、さあ体操教室をつくらうでは時遅しです。今から体操ブームへの準備を整え、ブームがきた時には、愛好者の受入体制が万全に整備されている状況をつくらなければならないのです。

この環境整備は、日本の体操界関係者が一丸となって取り組まなければなりません。具体的には各地での「2011世界体操東京大会」の告知から始まり、体操クラブや体操スクールの新設、クラブやスクールの存在・認知度向上などです。

「2011世界体操東京大会」が開催中の10日間は、我々体操人が体操人であることを誇りに感じ、体操の素晴らしさを社会にアピールし、そして体操をメジャースポーツに押し上げる最高のチャンスとして、全ての体操人が所属の関係なく、上下の関係なく、無我夢中で体操をアピールする、そんな10日間にして参りたいと存じます。

本年3月に「第11回アジアジュニア体操競技選手権」を幕張にて開催いたしました。5月の「全日本体操競技選手権」と6月の「NHK杯体操」はNHKにて、7月の「体操JAPAN CUP2010」はフジテレビにて放映していただきます。

また、昨年より大会改革の一環として開始しました「全日本団体・種目別選手権」の分別開催も、体操の楽しさ、醍醐味を

訴求する大会へと改革が推し進められたと存じております。来年の「2011 世界体操東京大会」に向けて、さらに機運を盛り上げて参りたいと存じます。

(一般体操の普及)

体操を体験するのに最も入口が広く親しみ易いのは、誰でも楽しめる体操「一般体操」だと存じます。「少子高齢化社会」、「価値観の多様化」が急速に進む中、一般体操が社会で果たす役割は決して小さくないと存じております。昨年より、演技発表が中心の「体操祭」に加え、「コンテスト」の実施により、更に一般体操の魅力が高まりました。現在、全国に一般体操担当者設置、地域での「体操祭」の開催を推進しております。「一般体操指導者」の育成を含め、引き続き一般体操の普及発展に努めて参ります。

また、多くの体操愛好者及び体操のサポーターは一般体操の領域だと考えております。「誰でも気軽に取り組める健康に直結した運動＝一般体操」は、体操ニッポンの底辺拡大に貢献して参りたいと存じます。

(男子新体操の普及)

男子新体操は 2009 年度より国体正式種目からの休止が成されました。休止の主な原因は、国内の普及率が低いことと、世界選手権が開催されていないことでした。男子新体操の国際化につきましては、既に国際体操連盟の総会において日本から国際化の要望を提出致しましたが世界各国からの賛同を得ることはできませんでした。今後は国内における普及活動を積極的に行うことが当面の課題となります。

一昨年よりカルピスのご支援を賜り、男子新体操をカルピスソーダのCMIに起用していただき、Web 上での「カルピスソーダカップ」開催などの手法により、男子新体操の知名度向上に努めて参りました。本年度は 4 月より、男子新体操を題材にしたドラマ「タンブリング」がTBS系全国ネット(土曜日 20 時～21 時)にて放映されます。男子新体操を普及啓蒙するには絶好のチャンスとなります。ドラマ放映期間中にはブログを開設し、男子新体操の認知度を高めるとともに、男子新体操の無料体験教室を全国で展開し、男子新体操愛好者の増員をはかって参ります。これまでの国際化の施策から、今後は地に足をつけた国内の普及対策を一步一步確実に行っていく施策にシフトして参ります。

(地域活性化)

一昨年より、自立した逞しい協会運営を目指して、各都道府県協会・連盟ご推薦の役員を本協会負担にてビジネススクールに派遣し、協会運営関係者にマネジメント能力を培うという人材育成に取り組みを始めました。

本年も本事業を継続し、ビジネス感覚を持ち、地域や日本の体操界の将来を担う人材の育成に取り組んで参ります。

また、本年度からの Web 登録制度導入の主旨は、各都道府県協会・連盟が登録業務に多大な時間と労力を割いていることの負担を少しでも軽減したいとの思いからでございます。社会の急速なIT化の流れから、いずれは手作業ではなく Web 登録に移行していくものだと存じます。様々な課題はあることと存じますが、前向きな取り組みをお願い申し上げます。

さて、全国各地域では様々な体操活性化施策が行われています。全国に成功事例は多くございますが、残念なことに、これまではその成功事例が全国で共有化されることなく「体操ニッポン」の財産となっていません。各地域での活性化成功事例を全国で共有化することで、「体操ニッポン」の知的無形財産をつくって参りたいと存じます。二つの手段を導入いたします。

一つは、「地域活性化成功事例・表彰制度」の導入です。各地域より活性化成功事例を報告していただき、それを表彰する制度を導入致したいと存じます。「地域活性化・最優秀賞」、「優秀賞」、などを選考し表彰いたします。表彰された成功事例を全国に発表し、共有化、水平展開できれば、地域格差解消の一助になるとともに、より多くの地域の活性化につながることを期待しております。

二つ目は、「地域協会運営 How To BOOK(運営マニュアル)」を制作いたします。各地域協会は世代交代の時期を迎えつつあります。しかし、各地域協会の運営はボランティアに支えられ、その運営ノウハウは形として残っていないのが現状ではないでしょうか。全国各地域協会の運営ノウハウを一冊の本にまとめることを企画いたします。「こんな時どうすれば良いのだろうか?」、「何か良い手立ては無いかな?」などの協会運営に関するノウハウや成功事例をまとめ、「体操ニッポン」が、これまで積み上げてきた知恵を財産に変えて参りたいと存じます。

(むすび)

「2009 世界体操ロンドン大会」での内村選手、鶴見選手の活躍は多くの国民の皆様感動を与えました。我々はロンドンオリンピックでも、同じように国民の皆様感動を与えることができるのでしょうか。今や常勝が義務付けられた「体操ニッポン」は何をなすべきなのでしょう。

シドニーオリンピック後、本協会は様々な改革に挑戦し続けて参りました。その結果が 2004 年アテネオリンピック、2008 年北京オリンピック、2009 年ロンドン世界選手権の結果として表れたのだと存じております。

我々は引き続き、「体操ニッポンのあるべき姿」を求め続けます。体操人が体操人であることを誇りに思える、そんな日本の体操界をつくって参りたいと存じます。そのためには、勇気をもって改革に挑戦し続けることが、唯一目的を達成する手段であると確信を致しております。

次の戦場は、「2011 世界体操東京大会」です。我々は東京大会の成功を目指します。ロンドン強化本部は選手の活躍。事業委員会は大会運営の成功。そして全国の体操関係者は全国各地での体操の普及啓蒙です。

(財)日本体操協会は今年「創立 80 周年」を迎えますが、「2011 世界体操東京大会」を終えるまで、「80 周年祝賀会」は行いません。東京大会の成功こそが、協会創立 80 年の集大成であると存じております。

我々は、今この時から東京大会に向けて全力で走り続けることを誓います。そして、東京大会をステップとし、ロンドンオリンピックでの大ジャンプを遂げるために、本年度の本協会のスローガンを「力強い助走」と致します。

暗いニュースの多い日本、閉塞感漂う日本、そんな空気に思わず「守り」に入ってしまうがちですが、我々「体操ニッポン」は決して守りに入らず、たじろぐことなく挑戦を続け、「2011 世界体操・東京大会」、「2012 ロンドンオリンピック」での飛躍に向けて、本年度は全国の体操関係者とともに「力強い助走」を始めます。

全国の体操関係者の皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。平成 22 年度(財)日本体操協会政策方針といたします。